
魔法先生ネギま！アンチなにそれおいしいの

神白漣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！アンチなにそれおいしいの

【Z-17】

N
4
8
4
2
Y

【作者名】

神白漣

【あらすじ】

世界は暗黒へと導かれる。それを阻止するために立ち上がった勇者翔。人類の明日、日の光を見ることはできるのだろうか。すべては彼らにかかっている……

-
-
-
-
-
-
-

.....

[illegible][illegible]

……うそです（笑）テンプレ転生者が面白おかしく第二の

人生を歩んでいくお話です。

プロローグ（前書き）

初投稿です。温かい目で見てください。

プロローグ

初めまして。俺の名前は天年翔。年は、18。今年度で高校卒業のはずだった。なんで、過去形なのかって？
それは・・・・・・・・・・

俺がさつきしんだからさ（笑）いや、笑えないよ。死にかたが虚しいですよ。進学校の生徒の朝は早い。なぜなら、補習という名の拷問があるからだ。真剣な話、朝の7時半に登校とか俺に死ねと言ってるのか？まあ、もう死んじやってるんだけどね。で、今日俺は珍しく寝坊してとても急いでいたんだけど、やはり朝食は食わんといかんやろ。だから、家のババアに「朝飯」て言ったのよ。え、反抗期かって？いや、もうねそんなもの小学生の時にすぎました。でも、ババアも寝坊で、なんも作ってなかったから、バナナを食べたわけよ。それで、食い終わったバナナの皮を投げてしまったのが、運のつきやった。そう、俺は急いで学校に行こうとして、バナナでを・・・・・・・・・・滑らせなっかたんだ。えっ、そこはすべろよ、だって？うん俺もそう思うだって俺の死因は葱を踏んで、

転んで頭を強打してしんだんだ。絶望した！足を滑らせた原因が葱なことに絶望した！と、当初はあまりの残念さに、周囲の状況にきづかなかったのだが、落ち着いてみると、俺は驚愕した。だって、目の前に土下座している幼女がいるんだぜ。お兄ちゃんビックリ！

「あの、なんで君は土下座してるの？」

「本当に、すいませんでしたー！！」

What!?

説明中・・・

「つまり君は神様で俺の書類（人生）の幸運を誤って最低ランクにしちゃったら、俺死んじゃったわけ？」

「はい、そうです。ごめんなさい！」

「神様なんで、なんで俺の死因が葱なんですかー！！！」

「ええー！怒るところそこ・・・原因はあなたの母親が昨日使った葱を外に出していたからです。」

「あの・・・くそババア！！！！（全国のおっかさんすいません）」

主人公暴走のため次回に続く？

「続かんわ、ごめん神様取り乱して」

「いえ、誰しも叫びたい時があるものでしょう」

なにこいつ、お前が一番の原因だ。で、結局なんで俺はこんなところにいるんだろ？

「それはですね、私のミスであなたを不幸にしてしまったため転生してもらったかと？」

転生？あの輪廻転生のこと？

「まあ、そう捉えてもらって構いません。つきまして何か要望はありませんか？」

「要望て何を？」

「例えば、NARUTO写輪眼とかブリーチの斬魄刀とかですよ」

「つまりアニメや漫画などの技や能力などを要望していいということか。なあそんな能力が必要なほど危険な世界なのか？それといまさらだけど俺の転生場所はどこ？」

「そうですね、まあまあ危険でしょうか。それと転生場所は『魔法先生ネギま！』です。」

「俺はねぎに恨みでもかっているのか。」

「それで、要望はどうします？」

「そうだな、まずは俺の幸運ランク、直感ランクをEXにしてくれ。」

「へえ、そこから行きますか。はいいいですよ。」

「で、次に『伝説の勇者の伝説』の全ての式を解くものと全ての式を編むものをあわせた、ライナ＝エリス（寂しがり屋の悪魔）をくれ。もちろん代償なしで頼む。」

「これは、チートですね。でも代償はなしは無理なので、魔力の消耗ですね。」

「ああそれでいい。後これが最後なんだが『D・Gray-man』のノアの能力をくれ。これは人間を殺したいとかの殺人衝動を抑えてくれ」

「はい、わかりました。わたしもその漫画好きですから、力入れて頑張ります。それじゃ、新しい人生たのしんでください。」

「ああ、神様ありがとな。」

そういつて俺の意識は闇へと沈んでいった。

Black out , , ,

プロローグ（後書き）

主人公チートですね。私は自重しませんので。

次回、主人公の転生先がわかります。では、よろしく。

ここは田舎です。（前書き）

なんとか、書き終わりました。では、どうぞつたない文章ですが
お読みください。

ここは田舎です。

ここは、どこなんだろう？意識が戻り周囲の状況を確認したところ自分が縮んでいた事実には驚愕したよ本当。あの幼女神、赤ちゃんからやり直す言えや。ということ、ベビーベツトから周囲を見ること叶わず、睡魔に襲われそのまま目を閉じていった。お休み。

五年後・・・

いやあゝ久しぶり。自分の新しい名前とここがどこなのかわかったよ。あの後、うちの母ちゃんに起こされてビックリ、母ちゃんマジ美人。で、どうやら俺の名前はマギ・スプリングフィールドというらしい。うん、外人さんだね。で、ここはイギリスのウェールズの森で魔法使いの隠れ里らしい。俺さあ『魔法先生ネギま！』の原作で知らないんだよね。だから、最初、村で人が飛んでいるのには腰を抜かしてしまったよ。題名に魔法であるじゃないかって、勘弁してくれよ、一般ピーポーだった俺に、空飛ぶ人間や擬似雷落とすやつ見たら、わあゝファンタジー何てのんきなこといってられません。

あ、能力だけだね、神様は約束守ってくれたよ。まず、幸運と直感だけど、新しいお母様、下の弟を産むとき、産んだら死ぬってお医者さんにいわれてたけど、滅茶苦茶神頼みしたら、すぐく安産でした。これおれのおかげじゃない？後、直感だけだいたい何か自分にとって都合の悪いことが起きるのがわかるよ。うん、これは本当に助かる。

次にライナ＝エリスだけど、これはやばい。ありとあらゆる構成式が見えるし、一回全てを解く式で森の木を解除したら制御できず

に森の木全部消してしまい、あわてて全てを編む式を使って修復したよ。そのとき、軽い脱力感に襲われたんだけどこれが多分代償の魔力消耗なんだろうと思いました。

最後にノアの能力なんだけど、3歳ごろ死ぬほどの原因不明の高熱に襲われ1か月悪夢にうなされたよ。で、世界の終焉だの人間を殺せ殺せとうるさかったけど、神様がちゃんと殺戮衝動を抑えてくれたらしく、暴走することなく目がさめたよ。で、そのあと顔を洗おうとしてこちらの世界にきて何度目かわからないけど、口をぽっかゝんと開けたままのあほ面してしまった。そーいや、神様、D・Gra、力入るて言ってたっけ？しかも俺、容姿がティキミツクなんだよね。変な所まで似せないで欲しい。だって、鏡見たら額に聖痕が浮かび上がっていたんだもん。母さんにえらく心配してきて宥めるが大変だった。でも、抱きつかれたときに胸が当たった時は役得とか思ったけど。で、高熱出した後ノアズメモリーのおかげなのか、力は簡単にに使えた。お気に入りには快樂のメモリーかな。空気の足場をかためて空を飛んだ時自分も脱一般人になってしまったこと自覚し、

少しだけ寂しかったといっておこう。

「兄貴〜！飯らしいぞお〜！母ちゃんが来いって。」

うん？考え事していたらいつの間にかこんな時間か。

「わかった、今いくよ、ナギ」

続く！

ここは田舎です。（後書き）

かなりのご都合主義ですね。ナギの兄さんとしてがんばります
笑）

定時連絡です。(前書き)

今回は少し短いです。ではお楽しみを。

定時連絡です。

やあやあ、朝の人にはおはよう、昼の人にはこんにちは、夜の人にはこんばんは。みんなのヒーロー、マギだよ。えっ、みんな、そんな悲しい子を見るような目で見つめないで！

ごっほん、ふざけすぎてすみません。この世界に産まれて早十年うん？進むのが早すぎるだって？これは、大人の事情です。いい子、悪い子関係なく、深く突っ込まないでくれると非常にうれしい。

5歳のころから、魔法使いとして修業初めただけで、大方の魔法は使えるようになったよ。まあ、魔眼のおかげなんだけど。でも、魔力制御は大変だった。俺は、先天性魔力超過現象という病気で、普通の魔法使いの三十倍の魔力保有者らしい。そのため、子供のころにはその魔力には耐えられないので、『ハーメルス（神を縛る紐）』というマジックアイテムで一般魔法使いレベルまで抑えている。それでも、本質の魔力量は変わらないため制御が大変。完璧にできるようになるまで三年かかった。

後、気なんだけど、瞬動、虚空瞬動ぐらいでほとんど手を付けてない。それより魔法が楽しくてしょうがない。術式がわかるおかげか、パズルのように入れ替えたり組み替えたりしているうちにはまってしまった。そのため、周りに魔法オタクとよくからかわれる。

周りといったが、うちの村はそこまで大きくないため、子供の数が俺とナギ後、年の離れた兄を含めて、5人ほどしかない。そのため、俺とナギという小さい子供はまるで村の子供の用に扱われ、悪さばかりするうちのおバカな弟は近所のスタンおやじにいつも

怒鳴られている。

俺はどうなんだかって？前世は後少しで社会人な人間が子供のあふれるパワーにはついていけません。しかも、うちのマリア母様は病弱なため、なるべく大人しくして、家からあまり出ません。えっ、このマザコンやろうですって？失礼な、その通りです。だって、荒ぶる炎のように紅い滑らかな髪でありながら、今にも消えてしまいそうな儂げな微笑み。これを女神と言わずして何と言う。と、まあ楽しんでいるおれです。

side out

マリア side

私には三人の息子がいる。長男はもう立派な大人で村を離れて仕事をしている。今私はマギとナギの子育てが大変。ナギは活動的によくイタズラをしては、村長のスタンさんに怒られている。マギはナギと違いとても大人しい子で病弱な私をよくサポートしてくれる。最初のころはいろんな病気にかかったりして大変だったけど、いまではナギの面倒をよく見てくれるいいお兄ちゃんだ。それに、勉強もよくできとても優秀だ。だが、あの子の魔法関係に関してはいまだに苦労が絶えない。五歳のころ初めて魔法の初歩『プラクテ・ビギナル（火よとまれ）』を唱えさせたら、火炎放射のように火が出て危うく家が燃えそうになった。そこからは、まず魔力制御に力を入れながら教えようと思った私は悪くないと思う。しかし、マギは天才だった。一度教えた魔法はすぐに覚えてしまい、しかも現存する魔法をより効率よくしたり、威力をあげたり、さらには新しい魔法まで作ってしまった。しかもその作った魔法がえげつない。魔法反射てなに！？アンチマジックフィールド？魔法が使えないじゃない！とんでもないものを作っていく。たぶん本国やアリアドネー

の学ああ者たちに見せたら腰抜かすわね。 まあ、このように私の可愛いエンジェルちゃんマギが天然魔王に見えるのは気のせいじゃないよね？はあく私この子の育てかたどこで間違ったかしら。

s i d e o u t

定時連絡です。（後書き）

いやぁ勝手に解釈してしまいました。お母様の名前ありきたりですがどうですか。

やはり、シンプルイズベストだと思いました。

というかナギの母親はどうなっているのかわからなかったので勝手に改造しました。

では次回はいよいよ冒険のプロローグです。よろしく願いします。

旅は道連れ、俺は拉致られ！？（前書き）

本日二度目の投稿。

よろしく願います。

旅は道連れ、俺は拉致られ！？

三人称 s i d e

ここはメルディア魔法学校。旧世界において小学生程度の子供たちに、魔法と一般教養を教える機関。また、裏を返せば「立派な魔法使い（マギステル・マギ）」つまり、メガロの忠実な犬を育てるための場所である。

そこに二人の天災がやってきた。二人は今校長先生に怒られている。

「アニキ！俺眠たいけど、寝ていい？」

真っ赤な髪を持つ兄弟のうちのアホ毛の弟が、目をこすりながら自分の兄に尋ねている。

「駄目だ、今はとにかく爺の話聞いとけ。聞かないと癪癪を起して説教が長くなる。」

前半だけ聞けば、優等生だが後半ですべて台無しである。

「これ！マギ！ナギ！儂の話を聞いとるのか！！」

「聞いてない。」

「うがぁー！！」

今日この二人がここに呼ばれたのには理由がある。弟のほうは座学が大っ嫌いで、授業は抜け出すは、教師に雷の上位古代呪文『千の雷』をぶちかましたりと問題を犯し、兄のほうは成績は優秀だが優秀過ぎて周りがついてこれず、ついには一人の魔法教師が自信をなくし、田舎に帰ろうとするなど、二人ともアプローチは真逆だがかなりの問題児らしく、他の教師では手におえないため校長室に呼び出された。

が、二人の問題児ぶりはすさまじく校長も、もうゴールしてもいいよね、安西先生、とフオフオフオの白髪のぽっちゃりの幻覚が見えたらしい。

「ナギ、どうしてお前は教師に魔法を唱えたのじゃ。魔法は危険なものとなつてゐるじゃろに」

校長は気を取り直して少し咎めるように少年に聞く。

「だって、あいつ俺が魔法が覚えられないのバカにしゃがったんだぜ。しかもアニキの名前まで出してきて。だから、ついカツとなつて、」

ナギは最初は怒りながらしかし、後から自分がしたことに少し反省し気落ちした声で喋った。ナギには一つ違いの兄がいる。兄は本物の天才だと思っている。魔法の腕、戦闘術すべてにおいて自分より強い兄を尊敬していて超えたいと思っている。一体お前はどの戦闘部族だと突っ込みたい。

校長も今回のことはナギだけが悪いわけではなく教師にも責任があるとわかった。後、マギの無自覚天災のせいでもあるが。優秀なものは何かと僻まれるがマギに至っては、魔法ではこの学校で右に

出る者がいないバグ。そのため、癖みがナギに降りかかっているのが現状だ。まあ、術式無茶苦茶な状態で千の雷を発動させるナギも十分バグだが。

「まあ二人ともこの学校に少しずつでいいから慣れていくのじゃ。友達を作るでも何でもいいから楽しんでいきながら大人になるための準備をしなさい。さあ明日も早いからのおく。ここらでお開きじゃ。気を付けて帰るのじゃぞおく。」

俺精神年齢大人なんだけど、と思いながら何ともしまらないマギがいたらしい。

side out

ナギside

おつす！俺はナギ・スプリングフィールド、最強の魔法使いだぜ。ま、まあ兄貴には勝てないんだけど。はあくだいたい魔法合戦したら確実に負ける。近接戦闘に関しては身体能力では勝てるけど、アイキドウ？だとかいう、日本の武術でいつの間にか倒されてるし。それで兄貴にあって、日本の格闘術を知っているのか？て聞いたらすごく焦っていたけどなんでだろう。まあなんか旅の人に教えてもらったて言ってたけど。それで納得した俺を見てこいつがアホで良かったって聞こえたのは聞き間違えだろうか？

しかも「情報は命だ」が信条らしくなぜか聞いたらほとんど答えられる。何でも知ってるんじゃないか？と言ったら何でもは知らない、知っていることだけだといって、その後俺は厨二病じゃない、厨二病じゃないと悶えていた兄貴は気持ち悪かった。

で、結局兄貴には全くかてねえ。けどいつか必ず勝ってやる。
そのためには・・・

side out

マギside

家に帰ったら、母さんにも怒られた。ナギは「あらあら」とほんわか注意だったけど、なぜか、俺だけは「お願い自重して」と頼まれた。異様に母が疲れているのは気のせいだろうか？母さん大丈夫？と聞くとあきれた目で見られた。少し寂しかったのは言うまでもない。

魔法学校に通ってから思うことなんだけど、俺は全然この世界ことを知らない。いや正確には裏社会の現状を知らない。情報はあらゆる富より価値があると俺は思う。どうにかして、世界のことを知れないだろうか。そんなことを思いながら日々の訓練をしていた。

朝、目が覚めたら俺は我が弟に拉致られている。何でも魔法学校では俺より強くなれないから外の世界で強い奴と戦いに行くらしい。俺も情報集めがなかったからそこまで気にしない。ただ、俺も外でいろんな奴と勝負したら強くなれるんじゃないか。それを言った時のナギのあほ面は死ぬまで忘れられない。

side out

ナギがマギを超える日は来るのだろうか？

マギ十二歳、ナギ十歳、相も変わらずしまらない旅立ちであった。

旅は道連れ、俺は拉致られ！？（後書き）

ナギのアホっぽさは出せたでしょうか？

ナギの赤い悪魔化。彼にも遠坂家の呪いがかかっているのでしょうか。

それでは次回むつつりスケベ（青山詠春）と異常性欲者アルビレオ・イマがでます。

ノシィ〜

旅にお金は必要です。(前書き)

今回はあのムツツリーニの登場です。

駄文ですが、お楽しみください。

旅にお金が必要です。

マギside

村を出た俺たちは父親の知り合いがいる麻帆良学園を目指して旅をはじめたんだ。麻帆良は前世の故郷日本にあるらしく、最初はね、俺は柄にもなくはしゃいでいたんだよ。そう、麻帆良についてからうちのバカが一銭の金を持ってきてないという天然ボケをしるまでは。

「お前やつぱバカだろ。……いや知ってたさ、お前がどうしようもない鳥頭で知ってたよ。でも、金くらい出ていく前に用意しとけよバカナギがあー!!」

ヒュウッ、ドッカアーン!!!

「うを、あぶね。しょうがねーだろ。忘れちまったもんは。それより、急に魔法ぶちこんでくるな、バカアニキ!」

ゴロゴロ、ズツカン!!!

「お前にだけには、お前だけには、バカと言われたくはないわあー!!!・・はあはあ、馬鹿らしい、体力の無駄遣いだ。」

なんかいろいろ疲れたよ、お母様。このアホ（ナギ）の面倒を見るのは大変。とにかく今はどうやって路銀を稼ぐかな。今ちょうど、麻帆良祭という行事中らしいから何らかの賞金大会か何かないかな。うん、なんかの広告か？何々、賞金百万円、まほら武闘会だって。ラッキー、いい物件を見つけた。さすが幸運EX。あれ？でも、なんで俺って騒動に巻き込まれやすいんだろ。また、あの

幼女の仕業じゃないだろうな。あやしい。

「ナギ、この大会に出るぞ。賞金出るし、もしかしたら強い奴と戦えるかもしれないぞ。」

「うお、さすが兄貴。早く申し込もうぜ。」

「うん、そうだな。受け付けは中央広場であるらしいし、締切が近いから急ぐぞ。」

「おう」

俺たちはすぐに受付をして、予選に出た。俺たち二人はAブロックラしい。

・・・はつきり言おう、弱かったと。まあ、一般人相手じゃこんなもんか。でも、Bブロックの日本刀持った剣士は強そうだった。今のナギ同等、近接戦闘じゃ俺も負けるかもしれないな。なかなか楽しみだ。

強い相手との戦いは心躍る。ふふ、明日の決勝トーナメントは楽しみだ。青山詠春、どんな闘いをするのかな。やっぱ観客の度肝を抜きたいね。さあ明日に向けて仕込んでおこうと。

次の日・・・

「さあーやってきました、まほら武闘会決勝トーナメント。古今東西あらゆる武道の達人が己の体で、技術で、そして心でぶつかり合うこの熱き闘いが今始まる。括目せよこれが武の極致である。」

うおー！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

ナレータの演説のおかげか、見に来た観客のテンションは一気に上昇している。ここ麻帆良はいろいろとぶっ飛んでいる。麻帆良にある丘の上には世界樹と呼ばれる木がある。その木、真の名を神木・蟠桃というらしく、世界でもトップクラスの魔力含有量らしい。また、霊地としての格は一級ぽい。そして何より、学園全体にかけられている認識阻害魔法。これのため予選でも魔力や気を無詠唱ではあるが使っている人を見ても何もおかしいとは思ってないらしい。

間違はなくここは魔法使いの天国だね、一般人からしてみればいい迷惑だろうけど。

さて、決闘への準備でもしますか。ナギと当たるのは決勝か。そこまで負けないと思うけど、油断はしちゃ駄目だな。

時が流れ準決勝・

「次は準決勝、ここまでその精錬された剣技を見せてくれた青山選手。対するはこの大会に神風のごとく現れたスプリングフィールド兄弟が兄マギ選手。ここまでの全で一撃で倒してきている両者。どんな闘いになるのか必見です。それでは、始めっ！」

俺は合図の後すぐ瞬動で相手の後ろに回り込み遅延呪文で魔法の
 射手17矢を撃ち込む。

しかし・・・

「神鳴流に飛び道具はきかん。はぁー、ざんがんけん斬岩剣」

ていつて放った魔法全てを撃ち落とされ、なんか地面にクレータ
ーができるほどの上段切りがきた。木刀でこの威力、真剣ならどの
くらいと少しビビった。

しかし、こちらもなめてもらって敵わない。これでも魔法世界の
異端児とまで言われている俺がただの魔法の射手など打つわけがな
い。

「青山詠春だっけ。すごい剣の使い手だね。君みたいな人を待てい
うのかな、とても楽しい闘いだっただよ。」

「確かに私は京都神鳴流青山詠春です。マギ殿も入りと出がほとん
どわからない瞬動いやもうそれは縮地ですね、その技術すばらしい
ものです。それよりだったよ、とはどういう意味なのです。私はま
だまだ闘えますよ。」

「ふむ、まだ気づかないの。ほら周りの観客も叫び始めたよ。」

「なにを、言つて……はぁ!？」

詠春はいつの間にかパンツ一丁になっていた。俺は魔法の射手に衣服の繊維を溶かす魔法を組み込んでいたのだ。それが木刀で撃ち落としたあと発動。空气中に分散した魔力残根が服を溶かしたという絡繰りさ。まったくもって無駄遣いと言われるが、武装解除と違ってこちらのほうがロマンがあるだろ（キラッ）まあ、男に使うものではないが、、いや、もう男に使うのはこれっきりにしよう。気持ち悪い。

「はいポーズ。ほらほら、君の写真集を全国ネットに流してあげるから頑張つて。きつと露出狂のお友達ができるさ。」

パシャパシャ、パシャパシャ

「うおー！そんな友達いらないから！カメラで撮るのはやめてくれ。参った参ったから！！」

「うん……………いや！（キラリッ）」

「NO!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

この後、大会監督が止めるまで赤い悪魔のいじめもといカメラのフラッシュ攻撃は止まらなかった。

一人の変態ドSのせいで、将来勇猛な青年の一生のトラウマがで
き、観客が同情と憐みの言葉を送ったのは言うまでもない。

これが将来サムライマスターと呼ばれた英雄と紅蒼の魔王、戦場
カメラマン、敵に回したら必ず殺される（社会的な意味で）と呼ば
れた英雄との一方は決して思い出たくない哀愁溢れる出会いであ
る。

続く……………

旅にお金が必要です。（後書き）

まず一言、どうしてこうなった（笑）いやぁ～最初はまともに闘わせるつもりだったのですが、最後はまるつきり主人公が変態化してしまいました。

私的にからかうのNO2に位置してますから彼。

詠春君が精神的苦痛で円形脱毛症にならないよう、ご冥福をお祈りいたします（笑）

次回の投稿は少し遅れるかもしれませんが、まあ、そこは学生の忙しさを考慮していただけると幸いです。

新しい仲間（前書き）

三日ぶりの更新です。なかなか大変でした。

ではお読みください。

新しい仲間

近衛近衛門 side

「あ、あにき、路銀を忘れたのは謝るからも、もう許してくれ！」

「何言ってるんのナギ。俺はぜんぜん怒ってないよ。」

「滅茶苦茶怒ってんじゃない！目がマジなんだよ！」

「あん？なんか文句あんの？幼少の頃の黒歴史を暴露されたいの？
うん？」

「なまいてすんませんでした！！だからあの事だけはあの事だけは！！」

闘技場の中心に手足を縛られている赤毛のアホっぽい少年ともう一人は同じく赤毛なのじゃがひどく冷酷な微笑みを浮かべながら魔力弾を当たるか当たらないぎりぎりに撃つ少年。これ何というんじやったかのお？ほう、そうじゃった、こういう場合こういうんじや。

「これ、なんてカオス？」

一週間前じゃったかのお、知り合いの魔法使いから息子二人がこちらに来るという連絡があったのじゃ。兄は魔法反射というアリアドネードの学者たちが挫折し不可能としたその理論をわずか六歳のころに確立したまさしく魔法の申し子。一方弟のほうは理論など全てぶっ飛ばして魔法を使うバグ、また調査によると精霊に愛されておるらしい。

タイプは違えど二人とも間違いなく天才。しかし、友人の話ではかなりの問題児らしい。儂は当初そこまで気にしておらんかったのじゃが、その意味がこの大会で良くわかった。特に兄のほうは敵に回したら絶対にいかんタイプじゃ。儂もよく妖怪とまちがえられるがマギ・スプリングフィールドは悪魔という言葉でさえ霞むチートDS大魔王様じゃ。マジ儂ちびりそう。

「俺も家族の恥は言いたくないよ。だからばらしはしない。安心しろ。」

「本当か！？ありがと「ただし勝負はまだ終わってないからね」いやー！！！！！！」

そろそろ止めたほうが良いじゃろうか？じゃがさつき嬪殿を助けたときすぐくにもまれたのじゃが、どうすればいいんじやろう。とほほ、腹が痛い…………

s i d e o u t

マギ s i d e

ふういい仕事したよホント。久しぶりにストレス発さⁿげふんげふん強者との闘いができて気持ち良かったあゝ。

あの後、俺はナギをボコボコにした後棄権した。え、なんでかって優勝しようがしまいがどちらにしろお金は入ってくるからね。そこまで順位は気にしない。まあナギの奴は戦闘の疲れで保健室で休んでるけど。いやあ色々たまってたんだろうね、半年分ぐらいの恨みを込めて魔力弾ぶちこんだし。

で、それよりも

「さつきから俺いや、俺とナギを観察してる奴そこに隠れてんだろ。出てこいよ。」

そうさつきから俺たちのことを見ている奴がいることはわかっていた。まあ敵意がないからほっといたんだけど、さすがに観察されるのは気持ち悪い。

「おやおやバレテないと思っていたのですが、いつ頃から気づいていたのですか。」

そういいながら出てきたのは、ローブをかぶり胡散臭い笑みを浮かべた男だった。

「うゝん今日あの剣士と闘っているときかな。なんか観察するような視線を感じてな、なんとなくね。で、一体何の用？」

そういいながら俺は戦闘態勢に入る。いくら悪意感じなくとも隠しているという場合もある。こちらの世界はかなりシビアな世界だ。油断したら最後死があるだけだ。

「ええ、実は私をあなたたち三人の仲間に入れてほしいのです。」

「はあ？それより三人とはどういう意味だ？俺たちは二人で旅をしてるんだが。」

マジで何言っただこいつ状態である。

「ふふ、私のことは気づいたのにもう一人の方は気づかなかったようですね。ねえ、露出狂さん」

露出狂！？ま、まさか！？

「私は露出狂ではない！だいたい人のトラウマを思い出させるな！
！」

「青山詠春（露出狂）！なんでここに？」

「なにか私の名前に不愉快な補足がついているようなんだが。まあいい。私もお前たちの旅に連れていってくれないか？」

「マジで言っただのか、お前のトラウマを作った原因だぞ俺。」

実はこいつマゾなのか。俺は男のマゾに興味なんぞないぞ。つーか変態じゃないか。

「いやなんでさりげなく俺から距離をとるんだ二人とも。まあいい、本題に入るぞ。確かにお前はトラウマの張本人だが感謝してる部分もある。私は青山家の中でも天才と呼ばれていて自分でも知らないうちに天狗になっていたようだ。しかし、世の中にはまだまだ強い奴がたくさんいることがわかった。私はまだまだ強くなりたい。そのため君たちについていきたい頼む！」

へえー逆上するんじゃないで、自分の欠点を素直に認め改善しようとするなんて人間できてんなあ。俺だったら何倍返しにしてやろうかと考えるのに（笑）

「うん、まあいいよ。いちようナギにも聞いてみないとわからんけどたぶん大丈夫だろ。俺のことはマギと呼んでくれ。」

「恩に着る、私のことは詠春と呼んでくれマギ。」

「で、お前は結局誰なの？」

なんだかんだ言いながら、このローブ男の素性は一切わかっていない。不気味すぎる。

「私はアルビレオ・イマ。アルと呼んでください。私は世の中の面白いものを探して旅をしています。今回はあなたたちと旅をすれば面白いことがあると思います。話しかけてみました。」

素性はすごく怪しいけど、たぶん教えてくれないだろうな。まあとりあえず、

「いいよ、あんたもなかなか面白そうだ。よろしくアル。」

こうして、四人（一人爆睡中）はともに旅をする仲間となった。

「アニキ晩飯、腹減ったあゝ、むにゃむにゃ。」

「空気読めやこのバカナギ！」

ゴンッ！

「ぎゃあーーーー！！！！」

四人の出発はまだとおいのであった。

続く
.....

新しい仲間（後書き）

だんだん、主人公が壊れていってます。誰か止めて。まあ私が原因なのですが。

今回の話しはどうだったでしょうか。

なるべくほのぼの路線で行きたいと思います。

次回は魔法世界に入ります。

それではお楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4842y/>

魔法先生ネギま！アンチなにそれおいしいの

2011年11月21日12時35分発行